

一

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

著作権上の都合により文章の
掲載はできません

※設問の都合上、文章を一部省略しています。

問一 空欄Ⅰ、Ⅱに入る語として最も適切なものを次の中から選びそれぞれ記号で答えなさい。

ア また イ そして ウ なぜなら エ けれども オ ただし

問二 傍線部①「かつてある人がわたしに、モリツグミの声を一度もきいたことがないといったことがあります」とありますが、なぜ「ある人」にはモリツグミの声が聞こえないのでしょうか。本文の語句を用いて二十字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「春の夜明けの小鳥たちのコーラス」を言い換えた表現をこの後の文章から九字で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「脈打つように夜ごと高まり」とは、どういう様子のことですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部④「小さな」と同じ働きをする語を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア あらゆる生き物
イ 単調な夜
ウ 奏でる音
エ なじみ深い響き

問六 空欄Aに入る最も適切な語句を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 危険性 イ 芸術性 ウ 神秘性 エ 合理性 オ 懐疑性

問七 傍線部⑤「それ」の指す内容を主語を入れて七字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑥「それにほんとうのところは、あいたいと思っていないのかも知れません」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

問九 作者は、鳥や虫の声を聞くことをどのように感じていますか。文中より六字で抜き出して答えなさい。

問十 この文章と一致している内容を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 子どもたちの成長にとって親とのかかわりが重要で、親と一緒に経験したことはけっして忘れることはない。

イ 子どもたちに自然の音をたくさん聞かせることができれば、意識しないうちに音を聞く力が培われる。

ウ 「わたし」は、とくに『鈴ふり妖精』の^{こゝろ}声に心奪われ、その声を耳にすると今でもその姿をさがしてしまう。

エ 「わたし」は、懐中電灯を片手にひとつひとつの楽器をきき分けて弾き手のいる場所をつきとめてしまう。

オ あなたがたは、夜の虫の声に関心を示し、その姿をつきとめることで一層自然への親しみが増すのである。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

父の都合で東京から九州の炭鉱町に住む父の友人、野上源一郎に預けられた僕（立花新一）は、兄弟のように仲良くなった野上の息子、竹雄とその友だちとで釣りをしていた。すると、突然炭鉱の方からけたたましいサイレンが鳴り響き、僕らは炭鉱に向かって走り出した。

僕らはいっせいに立ちどまり、①一様に息をのんだ。いつもとはまったく異なる光景が、目の前に広がっていた。※1二坑の構内の正門の前には、ただならぬ②キンチョウ感がみなぎっていた。門をとりまくようにして、大勢の人だかりができていた。ほとんどがおばさんたちで、彼女らは息をのみ、押しだまつたまま門のなかをじつとのぞきこんでいる。おばさんたちはほほみんな、白い割烹着^{かつぽう}を身につけていて、その白い壁と張りつめた沈黙が、近寄りがたい威圧となつて立ちはだかっている。

竹ちゃんが強引に、③白い壁をかき分けて進んでいく。押しのけられたおばさんたちが④険しい表情で竹ちゃんをにらみつける。なかには声を⑤荒げて、しかりつけるおばさんもいて、壁はにわかにざわつきはじめる。騒ぎのなかで竹ちゃんの姿が、しだいに見えなくなっていく。

「あんた、野上さんとの竹ちゃんやないね。」

ひとりのおばさんの声がひびきわたる。

「父ちゃん、※2一番方ね。」

「うん。」

竹ちゃんが答えると、おばさんは大きく腕をふりながら、門のほうへ声をかける。

「※3労務の人、こん子をなかに入れてやり。こん子は野上さんの息子ばい。」

声を聞きつけた、正門を守る男たちが素早くかけつけ、人だかりのなかから竹ちゃんを抱きあげ、門のなかへ入れる。

「達夫、公一、はよせんか。はよ、こつちにこんか。」

竹ちゃんがこつちに向かつて叫ぶと、おばさんたちがいっせいに僕らをふり返る。

「あんたたちの父ちゃんも、一番方ね。今坑内に潜つちようとね。」

達夫とハム一がⅠうなずく。

「労務の人、ここにも二人おるばい。はようなかに入れてやり。」

白い壁が割れて道ができ、達夫とハム一が顔をうつむけたまま、Ⅱ歩いていく。③二人ともちらつと僕をふり返るが、目にはなんの感情もなく、すぐに門のなかに消えていく。

「あんたは、あんたは関係ないとね。」

さっきのおばさんが、ひとりとり残された僕に聞く。言葉が胸にぐさりと突き刺さる。おばさんの言うとおり、僕には関係ないから、竹ちゃんは名を呼ばなかったのだ。僕がうなずくと、おばさんが優しく言った。

「そうね、それはよかったね。あんたの父ちゃんが一番方やないんやね。」

僕はおばさんにつくり笑いを浮かべてから、その場をはなれた。ふいに、④ある言葉が心にわきあがってきた。

僕はあてどなくむやみに、あたりを歩きまわった。胸と腹のあたりにぽっかりと、大きな穴があいてしまったような気がした。そのくせ頭だけはみようにさえわたり、さつきわきあがってきた言葉が、激しく渦巻いてぼくをⅢ痛めつけた。よそのもの。よそのもの。そう、僕はよそのものなのだ。

「おい、立花。」

びつくりして声のほうへふり返った。

「おまえ、こげなところでなんしようとか。」

同じクラスの川井直道だった。⑤直道はいつものように弟を連れていた。彼は級長で、成績も良かったが、弟や妹の面倒をよく見ることで④ヒョウバンだった。

「答えんか。おまえ、こげなところでなんしようとか。」

僕のなかで抑えていたものが音をたててはじけた。僕は直道にかけ寄ると、たいして親しくもない彼にむかって、しゃべりだした。僕だけを残して、竹ちゃんたちが門のなかに入ってしまったことを、

IV 訴えた。

「わかった。もうわかった。」

直道がうんざりした顔で言う。

「おまえ、案外シャベリなんやな。教室におるときは、ほとんどしゃべらんくせに。」

⑥僕はハツとした。自分の⑦ムボウビさにどきつとした。

「いいこと教えてやろうか。」

直道が V 笑う。

「おまえ、入りたいんか。どうしてん、二坑のなかに入りたいんか。」

小柄な直道が上目づかいに僕を見る。そのまなざしには、性格のおだやかな彼にしては珍しく、挑みかかるような力のこもった光が射していた。

「さあ、正直に言うてみい。」

とっさに僕は答えた。

「入りたい。入れるんなら、入りたい。」

「よし、わかった。なら、いいこと教えてやる。」

直道は僕に目配せすると、ひざを折って弟を諭しはじめた。兄ちゃんは大事な用事ができたから、おまえは先にひとりで家に帰っていると言った。弟はちよつぱり心細そうな顔をしたが、すぐに元気な声で、うんと答えて歩きだした。

「いいんか。あいつ、ひとりで帰していいんか。」

僕が気まずさを覚えて聞くと、直道はこともなげに言った。

「心配なか。一本道やから、迷うことはない。」

弟の背中が小さくなっていく。弟は靴を左右逆にはいている。弟がふり返る。直道が邪険に腕をふって、早く行けというしぐさをする。僕のなかにふいに、いじわるな感情がわきあがり、棘を含んだ言葉となつて、思わず口をついで出た。

「直道、おまえこれでいいんか。あいつがひとりで家に帰るとこ、近所の人が見たらどう思うやろうのお。面倒見のいい兄ちゃんのヒョウバンが落ちるんやないか。」

直道の顔がさつとゆがむ。

「おまえ、なんが言いたいんか。言いたいことがあったら、はっきり言え。おまえみたいな東京もんなんがわかる。」

⑦僕は直道の敵意がうれしかった。この町で何か月、いや何年過ごそうとも、東京もんに変わりのないのだ。急に気が楽になった僕は、厚かましく彼に言った。

A

※1 二坑 二番目の炭坑のこと。炭坑とは石炭を採掘するために掘られた穴。

※2 一番方 炭鉱は二十四時間操業で三交代勤務のため、三つの勤務時間帯の事をそれぞれ「一番方」「二番方」「三番方」と呼ぶ。

※3 労務の人 企業で、労働力の使用・管理に関する事務を担当する人

問一 傍線部㉞㉟の漢字には読みを、カタカナには漢字をそれぞれ答えなさい。

問二 傍線部①「一様に息をのんだ」のは、なぜですか。次の文章に続くように、二十字以内で答えなさい。

いつもとは異なっていて、【二十字】が目の前にあったから。

問三 傍線部②「白い壁」とは、何のたとえですか。二十字以内で答えなさい。

問四 空欄ⅠⅡⅢⅣⅤに当てはまる最も適切な語を次の中から選びそれぞれ記号で答えなさい。

ア きりきりと イ にやりと ウ こくりと エ めんめんと
オ とぼとぼと カ しよんぼりと

問五 傍線部③「二人ともちらつと僕をふり返るが、目にはなんの感情もなく、すぐに門のなかに消えていく」とありますが、「二人」の気持ちについて最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 残された「僕」を気にしたものの、坑内にいる自分たちの父の安否が心配で「僕」のことを考える余裕がない気持ち
イ ひとり残った「僕」のことを思い、これから直面する辛い現実を考えて「僕」に心配をかけるように先を急ぐ気持ち
ウ 「僕」に助けを求めたいが、「僕」の父親は被害にあっていないので、これ以上道連れにはできないという強い気持ち
エ 仲間の「僕」にもついてきてほしかったが、「僕」には関係のないことだったと思い直しながらも腹の立った気持ち
オ 名を呼ばれなかった「僕」を心配しつつも、父たちの無事を祈るのが精いっぱい「僕」のことを忘れない気持ち

問六 傍線部④「ある言葉が心にわきあがってきた」とありますが、「ある言葉」とはなんですか。文中より抜き出して答えなさい。また、その時の「僕」の心境を表す言葉を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 焦燥感 イ 疎外感 ウ 寂寥感 エ 嫌悪感 オ 孤独感

問七 傍線部⑤「直道はいつものように弟を連れていた」とありますが、その弟の幼さがわかる一文を探し最初の三字を抜き出さない。

問八 傍線部⑥「僕はハツとした」とありますが、どうしてですか。その理由を「僕」の行動に気をつけながら、七十字以内で説明しなさい。

問九 傍線部⑦「僕は直道の敵意がうれしかった」のはなぜですか。次の文章につながるように考えて答えなさい。

直道は東京ものの「僕」に対して、【十字以内】から。

問十 空欄Aに入る最も適切な言葉を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 「直道、おまえはどうするとか。」

イ 「東京もんでも家族は心配なんだ。東京ものの何が悪い。」

ウ 「やっぱり、おまえ、あいつを追いかけて家に、はよ戻れ。」

エ 「うそやったんか。いいこと教えてやるち言うたんは、うそやったんか。」

オ 「さあ、教えてくれ。おまえの言うた、いいこと教えてくれ。」

これで問題は終わります。